中国現代文学選集 9　趙樹理集

霊泉洞　駒田信二訳

李家荘の変遷　岡崎俊夫訳

小二黒の結婚　小野　忍訳

貴　駒田信二訳

編

平凡社

中国現代文学選集
全20巻

霊泉洞他　　第4回配本・第9巻

昭和37年5月5日　発行　©　　定価 450 円

訳者代表　駒田信二（こまだしんじ）

訳者との申合せにより検印を省略します

東京都千代田区四番町4番地
発行者　下中邦彦

東京都板橋区志村1町1丁目番地
印刷者　川上胖

発行所　東京都千代田区四番町4番地　振替・東京29639　株式会社　平凡社

落丁，乱丁本はお取替えいたします

印刷　東洋印刷株式会社
製本　石津製本所

目次

霊泉洞……三
李家荘の変遷……一四五
小二黒の結婚……二七七
李有才板話……二九七
土地……三四九
福貴……三五九
態度決定……三七七
解説……四一一

霊泉洞

駒田信二訳

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

大きな山へはいったことのない人は、山のなかでの話をきいても、話にでてくる地勢のはっきりわからないことが多い。たとえば私が太行山での話をすると、かならずこうたずねる人がある、「太行山というのはいったいどのあたりなんです？　あなたのいう太行山は、ときには東向きだったり、ときには南向きだったりするが、それはどうしてです」と。こういうことをいいだす人は、大きな山へはいったことのない人である。名の知れた大きな山というものは、すべて、いくつもの山々のつらなったものであって、ただ一つの山をいうのではない。太行山についていうならば、河南省の済源県から山西の晋城・陵川・壺関・平順・襄垣・武郷・遼県・和順・昔陽、それに河南の輝県・林県、河北の武安・渉県・磁県・沙河・刑台を経て井陘にいたるまでの大小の重畳たる無数の山々をいうのであって、一つの山だけではどれも太行山とはいわないのである。もし太行山を横断しようとすれば、どこから登ったにしても、こちら側から向う側へ出るには二三百里の道程があり、そのあいだには登りもあれば降りもある、川もあれば平地もあるというぐあいで、ときには山を歩いているとは感じないことさえあるが、それでもそこはもう山の入口や出口とくらべると何百メートルも高いところなのである。

ところで、これから私が話そうとすることも、やはりこの太行山のなかの話である。この出来事は太行山の南端でおこった。そこに霊泉溝という谷がある。なぜそういう名がつけられたのかというと、谷のいちばん奥に、胡桃ぐらいの太さの泉が、積みかさなった石の下から湧き出ていて、十歩あまりのあいだ流れ、高さ一丈の岩の段から滝になって岩のくぼみに落ち、そこに二畝あまりの広さの、澄んだ水を湛えているのだが、むかし迷信のさかんだったころ、日でりにあうと、近隣二三十里の人々がいつもここへやってきて雨乞いをしたことから、この泉を霊泉と呼んだ。霊泉溝という名はこうしてできたのである。このあたりには七八十軒の家が谷の両岸に散らばっていて、それを総称して霊泉溝村と呼んでいる。四五軒の小さな部落にも、それぞれ、石窰上とか白土嘴とか、田家湾とか劉家坪とか呼び名がついているが、いちいち述べるまでもなかろう。

田家湾に田永盛という小作農がいた。老夫婦ふたりで劉家坪の劉承業の畑十二三畝を小作していたが、口の数がすくなかったので、まあなんとかくらしていけた。つぎつぎに五六人の子供ができたが、ひとりも育たず、四十すぎになっ

てからようやく男の子が二人さずかった。上のを金虎（チンフー）といい、下のを銀虎（インフー）といった。金虎は小さい時分、腕っぷしの強い肥った子で、気性が荒っぽく、やたらによその子とけんかをしては、いつも泣かしてしまって、その子のおふくろにどなりこまれた。彼らの家のすぐ前が谷で、その岸から谷底までは三丈ほどあった。金虎は五つのとき、うっかりして岸からころげ落ちたことがあったが、さいわい岸は砂まじりの土で、長年のあいだに雨にけずりとられて傾斜がついていたので、無事に底まですべり下りて、なんのけがもなかった。それからというものは、もうこわからぬどころか、あたらしい遊びかたを見つけたとばかり、人目をぬすんでは岸からすべり下りていた。だからおふくろがいくらズボンをつくろってやっても、二三日もたたぬうちに土すべりで破ってしまうのだった。あるとき、ちょうどすべっているところを、おなじ屋敷の東棟（ドンロン）の小蘭（シャオラン）という女の子に見つけられてしまった。小蘭が金虎のおふくろに告げ口をしたので、おふくろは三日間、彼を外へ出さなかった。彼はおふくろにもう決してすべりませんとあやまったが、一方では小蘭をうらんで、しばらくは小蘭と口をきかなかった。銀虎の方は、金虎よりも二つ年下で、体格も金虎より小さく、気性も金虎よりおとなしかった。田永盛夫婦はいつも、金虎は武（ウー）で銀虎は文（ウン）だといっていた。

田永盛は生涯、字を知らなかったので、子供たちには字をおぼえさせようと思って、二人の子供を前後して村の初級小学校へいれた。やはり田永盛が思ったとおり、勉強にかけては金虎は銀虎にかなわなかったが、ほかのことでは銀虎は金虎のように強くはなかった。劉一家坪（リューチアピン）の地主の劉承業（リューチョンイエ）の息子は幼名を接旺（チェワン）といい、大きくなってからの名を劉歩雲（リューブーユン）といった。この子は学校友達に幼名を呼ばせず、ついロをすべらして接旺と呼んだりする者があると、すぐなぐりつけた。彼は銀虎と同級だった。ある日、学校からの帰り道で、銀虎がうっかりして接旺と呼びかけたところ、彼は銀虎に拳骨を二つくらわした。金虎がすかさず接旺を二つなぐりかえした。すると接旺は泣きだし、すぐ学校へ引きかえして先生にいいつけた。先生が金虎に、

「上級生が下級生をいじめてはいかん」

というと、金虎は、

「接旺はどうして銀虎をいじめてもいいのですか」

といいかえした。この先生は劉承業に推薦されてきた人なので、接旺をやりこめるわけにはいかず、年の大小で是非をきめようとして、

「彼は小さくてお前は大きいんだ。大きいものはわきまえがなければいかん」

といった。金虎は首をひねり、ぎょろりと目をむいて、

「先生はそんなに大きいくせに、どうしておいらよりもわきまえがないんだ」

「ばかやろう！　お前のようなものは教えきれん、放校だ！」
「先生みたいなわけわからずには、教えてやるといわれたって、おいらの方からおことわりだ」
　この日から、金虎は家に帰ったきりどうしても学校へいこうとはせずに、永盛じいさんの畑仕事をてつだった。銀虎の方は四年の初級小学校を卒業した。永盛じいさんとしては、百姓は名前さえ書ければそれでたくさんだと考えていたところ、たまたま、おせっかいやきの張兆瑞（チャンチャオルイ）から銀虎を高級小学校へあげてやるようにすすめられた。張兆瑞がすすめたのにはわけがある。張兆瑞は劉家坪に住んでいた。劉家坪の劉承業は息子の接旺を高級小学校へやろうと思っていたが、村には高級小学校はなく、どうしても三十里もはなれた町までやらなければならなかった。劉承業はかねがね小説本で、むかしから何々大尽（だいじん）の息子は学校へゆくのに書童をやとったというようなことを読んでいたので、自分も息子に一人買ってやろうかと考えたが、思えば一介の地主たる自分にはそんなお大尽ほどの羽振りもなかったし、また当節の学校ではもう書童をつかうなどということはなくなっていたので、もしほんとうにそんなことをしたら笑いものになるだろうと思いはしたものの、しかし十二三の子供を三十里もはなれたところへ世話をする者もつけずに出してやるということは、劉承業としてはまことに心配でならなかった。彼はあれこれと思案したすえ、妙なことを思いついた。田永盛は自分の小作人だから、田永盛の息子の銀虎を接旺といっしょに学校へやれば、書童になるのがあたりまえではないか、「あれの親父が作っているのはおれの畑だから、あれが接旺の荷物をかついだり、部屋を掃除したりするのは、分相応というものじゃないか」と考えたのである。ある日、張兆瑞が世間話にやってきたとき、彼は自分の気持ちを張兆瑞に話した。だがそのときは銀虎を接旺の書童にしたいなどとはいわずに、接旺が町の学校へゆきたがっているが、つれがない、もし田永盛の息子もいくというのなら、いいつれになるのだが、と話したのである。張兆瑞は劉承業の家のことならどんなことでもよろこんで世話をやき、周旋役だろうと、保証人だろうと、嫁取りだろうと、葬式だろうと、なんでも手を出さないことはなかった。彼は劉承業からその話をきくと、翌日にはもう田永盛に話を通じた。それで銀虎は接旺と同じ学校にいくことになったのである。その後、銀虎は接旺の書童にはならなかったものの、だいたいは劉承業の思っていたとおりになった。というのは、銀虎の家で耕作しているのは劉家の畑だったので、銀虎は接旺に対してやはりいろいろ面倒をみてやらなければならなかったのである。ただ一つ、接旺親子にとって不満だったことは、銀虎の成績が、毎学期いつも接旺よりずっとよかったことだった。二年間の高級小学校を終り、銀虎と接旺はそろって卒業した。接旺は県の中学へ進むことになったが、さすがに劉承業も、また張兆瑞をつかって銀虎をつれに

すすめることはしなかったが、こんどは田家湾の小作人たちが張兆瑞にかわってその役目を演じたのである。小作人たちのなかには田永盛にこういう者もいた。

「銀虎はあんなに頭がいいんだから、お前さんももうひとふんばりして、あの子を中学へあげてやって、おれたち百姓仲間からもえらいやつを出してもらいたいもんだ」

前にもいったように、田永盛の家は口の数がすくなかったので、なんとか暮らしがたてられたし、それにいまでは金虎も十六になって、家のために半人前ぐらいの仕事はできたので、暮らしは前よりもらくになっていた、それで承知をしてしまった。

田永盛にとってこれはたいへんな誤算だった。中学生を県へ勉強にやるということは、小学生を町へ勉強にやるよりも何層倍もの金がかかるということを彼は知らなかったものだから、たった半年のうちに、彼が長年たくわえた金はほとんどなくなってしまい、いっそやめさせようかと思ったが、それではいままでつぎこんだ金がみんな無駄になってしまうし、さりとてこのままつづけるとなれば、今後の暮らしがたたなくなるという破目になった。田家湾の仲間たちはがんばれがんばれと彼をはげまし、みんなでできるだけの援助をしようといってくれた。翌年の春には、みんながなにがしかの金を出しあってくれて、どうにか半年はやっていくことができたものの、おたがいに小作人のこととて、みんなの力は知れたもの、あとの半年になると、やはり田永盛が自分でやっていくよりほかなかった。むかしは、小作人が借金をすることは容易なことではなかった。畑が自分のものではないから、金貸したちは彼らが返せないとき担保にとるものがない、それでなかなか貸さないのだった。しかし、穀物の代金を前借りすることは、できた。つまり、作物が伸びはじめたころに、仲買人からさきに穀物代を受けとり、穀物を刈りいれるとそれを送りとどけるという方法である。永盛じいさんは、銀虎が中学にはいってから二年目の下半期は、この方法できりぬけたが、一年たつと自分の方が食っていけなくなってしまった。

銀虎が中学三年になったとき、ちょうど、七七事変（蘆溝橋事変）が勃発し、翌年――一九三八年――の春には、日本軍が太行山に侵入してきて、中学は閉鎖された。銀虎はあと一学期というところで卒業できなかった。

それから二三日もたたぬうちに、日本軍は県城を占領し、県や区のもとの役人たちはみなどこかへ逃げていってしまって、野も山も敗残兵や土匪でいっぱいになった。百姓たちはこんな戦乱のときには、あっちへ逃げこっちへかくれして、めいめい自分のいのちをまもるよりほかしかたがなかった。ちょうどそんなとき、八路軍の指揮下の遊撃隊の一隊が霊泉溝地帯にやってきて、治安を維持し、民衆を動員して山村に抗日政権を組織したので、ようやくこの山の地区一帯に秩序

だった政治がおこなわれるようになった。田銀虎はこのとき抗日区の役場の仕事に参加した。

一九三九年、日本軍が太行山に大掃蕩作戦をしかけてきた。そのため遊撃隊は八路軍と協力して戦いに出かけ、地方の抗日活動は地方の党組織で大衆を指導してやっていくようにまかせられた。このとき、金虎は村で民兵になり、銀虎は区の指導部で連絡員になった。村人たちは一年あまりのあいだに組織され鍛煉されて、一年前とはすっかりかわっていた。むかしは地租をはらい、税金をおさめるだけで世の中のことなど考えたこともなかったのだが、いまでは、ある者は幹部になり、ある者は民兵になっており、その他の労働者・農民・婦人・青年たちもそれぞれ組織をもっていて、みな指導者のもとに集団的に行動することができるようになっていた。そこで劉家坪の地主たちは勝手なまねができなくなったことから、新政権に対してかずかずの不満をもってはいたが、風向きがかわってしまったので、しぶしぶみんなのあとについていくというありさまだった。

反掃蕩作戦が終ってからは、さきにいた遊撃隊は八路軍に合流してしまって、もう霊泉溝地帯にはもどってこなかった。冬になると、近隣の各県で閻錫山(イェンシィシャン)の軍隊や国民党の軍隊が抗日政府をうち破り、共産党員を捕えまわっているという話がつたわってきて、銀虎の区でも、たえず警戒を厳重にして蔣閻軍(チャンイェン)（蔣介石・閻錫山軍）の不意の襲撃にそなえるようにとの上部からの通知を受けとった。だが、長いあいだ警戒していたのに、なにごともおこらなかった。と、翌年の夏になって、とつぜん、国民党の軍隊が大挙しておしよせてくるという情報がはいった。

私の話そうとする物語はここからはじまる。以上は物語の前置きである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一

一九四〇年初夏のある昼、銀虎（インフー）の区では県からの緊急通知を受けとった。――国民党の軍隊がきょうの明けがた抗日県政府と県委員会を包囲して解体させた、さいわい同志たちは前から用意していて、夜半のうちにほかへ移っていたため、たいした損害はなかった、そちらでは緊急に手分けをして各村をまわり、公開の党員（非秘密党員）たちに県委員とともに北方へ撤退するよう連絡せよ、とのことであった。みんなは集合の場所と時間をうちあわせてから、それぞれ各村へわかれていった。

銀虎は霊泉溝（リンチュアンコウ）一帯の村々に知らせる責任を受けもった。彼は任務を受けると、まわる順序をきめた。まず三水鎮（サンシュイチン）に近い方の二つの支部に知らせてから霊泉溝へいって、暗くなってから霊泉溝支部書記の王正明（ワンチョンミン）と、村長の張得福（チャントーフー）とともに、こっそり集合場所へぬけ出していくつもりだった。

ところが思いもかけず、同窓の劉接旺（リューチェワン）が彼の計画をぶちこわしてしまったのである。劉承業（リューチョンイエ）は蔣閻軍（チャンエン）が近隣の各県で共産党をうち破っているという情報をきいて以来、息子の劉接旺を村から出して国民党と通じさせていた。この日、接旺はすでに軍といっしょに三水鎮まできていたのである。軍隊は県政府を解体させると、ただちに兵を分けて各区へ派遣した。ひとりの小隊長が二個分隊をひきつれ、接旺に案内させて銀虎たちの区の役所へいってみたところ、もぬけのからだった。そこで接旺は、区の者は霊泉溝へ移ったにちがいないと考え、小隊長に進言して、霊泉溝へやってきたのである。

銀虎は霊泉溝の田家湾（チンチャワン）の自分の屋敷へかけつけると、家へもよらずに、まず東の棟の王正明に上部からの通知をつたえた。王正明はそれをきくと、

「鉄拴（チェンユワン）と得福は洞穴へ書類の始末にいっているんだ。いそいで金虎に呼んでこさせて相談するとしよう」

そういいながらすだれをあげ、金虎を呼びよせてくわしくいいつけたうえ、金虎が出かけようとするところをまたいいふくめた。

「おい、絶対にほかの者にしゃべってはいかんぞ」

金虎が表門を出ようとしたとき、ちょうど、劉接旺が三四人の兵隊をつれて向うからやってくるのにでくわした。先頭の兵隊が金虎に拳銃をつきつけていった。

「出るな！　もどれ！」

金虎はなんのことやらわけがわからず、かけもどっていって王正明に告げた。

「接旺が、兵隊を三四人つれてやってきた。おれを出させないんだ」
「しまった！」
王正明と銀虎は口をそろえてそういった。
「誰か鉄拴たちに知らせて、いそいで逃げさせてくれるといいんだがなあ」
と王正明。
「だが、どうしたら知らせることができるだろうか」
と銀虎。彼がそういったときには、接旺と兵隊たちははやくも家敷へはいりこんでいた。接旺が東の棟を指さすと、兵隊たちは東の棟へおしかけてきた。接旺は銀虎を見て、
「やっぱりいたか」
といい、銀虎を指さしながら兵隊たちをふりかえって、
「こいつが区の幹部だ」
さらに王正明を指さして、
「こいつが村の共産党の責任者だ」
といった。兵隊たちは縄を出して二人をしばった。金虎が銀虎をしばろうとしている兵隊にしがみついて、
「おれたちになんの罪があるんだ」
というと、ほかの二人の兵隊が金虎を引きおさえて、
「なんだ、きさまは」
「そいつはぼけなすだ、おっぽり出してしまえ」
と接旺がいった。二人の兵隊は金虎を戸口のところまで引きずってゆき、なかの一人が、
「消えうせろ」
と金虎をけとばした。王正明の女房と娘の小蘭(シアオラン)はこのありさまを見て泣きだした。南の棟の田永盛(ティエンヨンチョン)老夫婦や北の棟の李鉄拴(リーティエシュワン)の嫁も東の棟のさわぎをききつけて、様子を見に飛び出してきたが、一人の兵隊が戸口をふさいでいるのではいっていけなかった。
金虎は兵隊に戸口から蹴り出されると、
「うちの銀虎がやつらにしばられたんだ」
と両親に告げた。
「どうしてだ」
と田永盛がきくと、
「わからん。正明おじさんもやつらにしばられた。これから誰が……」
金虎は「これから誰がつかまるかわからん」といおうとして、ハッと王正明が鉄拴たちに知らせなければならぬといっていたことを思いだした。みんなは金虎のことをばかだといっているが、実はすこし一本気なだけで、ある点ではむしろかしこいところもあった。彼は半分だけいうと、あとの半分はのみこんでしまって、門をかけ出していった。彼は村の西側の、石の洞穴へいく道をかけていったが、村の出口までいくと、銃をかまえた一人の兵隊に、
「村から出ちゃいかん」

とさえぎられた。そこで別の道をさがして走っていったが、そこにもやはり兵隊がたちふさがっている。

「だめだ。ほかの道もみなあいつらにふさがれているだろう」

と彼は思い、ひきかえして自分の家の前までいったが、そのときふと、子供のころいつもすべり下りていた谷の岸を見て、とっさに思いつき、岸の上にしゃがんでズルズルとすべり下りるなり、河床をつたって石の洞穴へ知らせにいった。

ところで、張得福と李鉄拴のふたりはどういう人物なのか。どこの洞穴へなんの書類を取りにいったのか。金虎は彼らに知らせることができたかどうか。彼らはふたりとも無事に逃げられたろうか。それをこれから話すことにしよう。

前に述べたように、霊泉溝の泉の出ているあたりは、ずっと石が積みかさなっていることはご存じのはず。その石の山はずいぶん大きくて、東西は一里、南北は幅五六十歩。長年のあいだに山つなみで上からおし流されてきて、谷間をふさいでいた。石は大小さまざまで、駱駝の形や象の形をした大きなものもあり、ひと突きすればひっくりかえりそうに積みかさなっていたが、実際はぎっしりとつまりあっていて、一人が推したぐらいではほとんどうごきはしない。大小さまざまな石の穴には、青々とした藤づるがのび、まるで草むらに家畜が横たわっているかのように、積みかさなった石をおおっている。このあたりの谷は非常にせまく、その両岸はいずれも十丈あまりの岩だった。北側の岩の下は落ちくぼんで大きな石の穴になっていたが、その前は乱石でふさがれていて、人ひとりが出入りできるくらいの入口があいているだけだったが、中には何百人もはいることができた。去年の夏、敵が何ヵ月も山を捜索したとき、霊泉溝の村人たちは、民兵のほかはほとんどみなこの洞穴で暮らし、村役場や党の村支部もここで仕事をした。やがて日本軍が山区を撤退してからは、みんなは村に帰って暮らすようになったが、大部分の家の衣服箱や家具はまだ運び出してなかったし、村役場や党の書類箱も洞穴の秘密の場所においたままだった。その書類箱にはおもてむきの（秘密でない）書類もはいっていた。張得福と李鉄拴は党の村支部の責任者だった、しかし、そのころ党は支部書記以外はみな名を出さなかった。張得福は行政上の職務は村長だったが、李鉄拴はおもてだった職務にはなにもついていなかったのである。二三日前から地主たちは国民党の軍隊がやってくるといいふらしていたので、村支部では万一にそなえて、あらゆる書類を埋めてしまうことに決め、そこで彼ら二人が書類を処分しにきたのであるが、彼らが出かけたすぐあとで、家に事件がおこったのだった。

金虎は岸の上からすべり下り、河底づたいに洞穴へかけこんでいった。すると張得福と李鉄拴が大きな石の上にあかりをおいて書類を整理していたので、いきなり彼らにつたえた。

「村へなんだかわからん兵隊がやってきて、銀虎と正明おじさんを縛りあげやがった。正明おじさんが、二人とも早く逃げろといってたよ」

張得福はそれをきくなり、まずい状勢になったと判断し、取りだした書類を巻いて、また箱の中へ入れ、その箱をこれまで置いてあった乱石の穴の中へ推しこみ、蓋にしてあった石ころをころがしてもとどおり穴をふさぎ、あかりを吹き消し、それももとどおり石の割れ目へ入れた。彼はそうしながら、鉄拴と状勢をはかりあった。金虎はそばでしきりに早く逃げるようにうながした。金虎が先頭に立ち、鉄拴と得福があとについて、三人は洞穴からもぐり出た。まずいことには金虎はここへくるとき、村で道をさがすのに手間どり、河底づたいに二里あまり遠まわりして時間をつぶしたので、彼らが洞穴から出てきたときには、接旺が二人の兵隊をつれて追いついてきていた。さいわいこのあたりの谷はせまくて深く、夕方は暗くなるのが早かったので、中からは外がはっきり見えたが、外からは中がぼんやりとしか見えなかった。金虎は彼らがやってくるのを見つけると、ふりむいて鉄拴と得福をおしとめた。

「引き返して谷の奥へ逃げよう。やつらがきやがった」

三人とも谷の上流は岩が高く出口のないことは知っていたが、接旺たちがだんだん近づいてくるのを見て、やむを得ず引き返した。接旺らが洞穴へはいってしまったらその隙に逃げようと思ったのだったが、予期に反して、接旺と一人の兵隊だけが洞穴へはいり、もう一人の兵隊は銃をもってその入口に残っているのだった。鉄拴たち三人はすこしはなれた岩壁の下の石の上にしゃがみ、野葡萄のつるで身をかくして洞穴の入口をうかがっていた。

「どうすればいいのかな」

と鉄拴がいった。すると金虎が、

「この具合なら、岩の上からたれ下がっている野葡萄のつるにつかまって登れるさ」

金虎は思いついたことはなんでもすぐやってみる男で、そういいながら一足ふみ出し、野葡萄のつるをつかもうとして跳びあがった。ところがつかめずに、両足をそろえて落ち、大きな石のあいだにはさまれた洗面器よりもすこし大きい石を踏みつけ、石といっしょに穴の中へ落ちこんでしまった。鉄拴と得福はこれにはドキンとした。鉄拴が穴の中へ手をさしのべてそっと呼ぶと、金虎も手をのばして鉄拴を引っぱり、

「下りてこい。中は広いぞ」

という。鉄拴と得福も跳びこんだ。得福は下りるとき、ついでに、いままで身をかくしていた野葡萄のつるを引っぱって入口をふさいだ。金虎は岩壁の下にあたるあたりを手さぐりしてみたが、なににも触れなかった、そこで、二三歩すすむと水を踏みつけた。水は足の甲をひたす程度だった。左右

のへりを手さぐりすると、どちらも岩石に触れたが、岩壁の下にあたる前方はどうなっているのか手触りがない。金虎はこうしてさぐりながら進んでいったが、前方にはやはりなにもなかった。鉄拴は金虎が踏み落とした石の上に立って外をのぞいてみようとしたが、つまさきを立てて首をのばしても、外の石とおなじ高さにしか首が出ないので、なにも見えなかった。しばらくすると、前方で人の話し声がきこえた。なにをいっているのかわからなかったが、彼らがだんだん遠くへいくのがききとれた。鉄拴はしゃがんで、

「やつらはいってしまったぞ。おれたちはこれからどうしよう」

といった。すると得福が、

「おれたちはここをうごいてはまずい。まず金虎を様子を見にもどらせよう。金虎、金虎、おい金虎よ」

鉄拴も呼んでみたが返事がなかった。二人は自分たちのまわりをやたらに手さぐりした。鉄拴が一本の手をさぐりあてて、

「金虎」

と呼ぶと、得福が、

「ちがう、おれだ」

「金虎は」

「わからん」

「マッチをつけてみようか」

「いかん。外からあかりをみられちゃまずいよ」

彼ら二人も金虎とおなじように、岩壁の下のあたりへ二三歩さぐり寄っていって水にはいった。そしてさらに手さぐりして進んでいったが、へりには触れなかった。

「ここならマッチをつけてもよかろう」

と鉄拴がいった。得福がマッチをすると、金虎が奥であかりを見て、遠くから大声で叫んだ。

「早くこいよ。中は広いぞ」

「ばかやろう、なにをさわいでやがるんだ。早く出てこい」

「もういっぺんマッチをつけてくれ。出口がわからなくなったよ」

得福は金虎にマッチをすってやりながら、一方では不思議でならず、鉄拴にいった。

「こんなところにこんな大きな洞穴があるなんて！」

彼がつぎつぎに五本マッチをすると、金虎はようやく彼らの前までやってきた。鉄拴がいった。

「金虎、洞穴のやつらはもういってしまったよ。おれたち二人はここで待っているから、お前はさきに村へもどって、あいつらが帰っていったかどうか、おれたちの仲間が幾人つかまったか、様子をさぐってきてくれ」

金虎は承知すると、出口をさぐって穴からはいあがった。鉄拴はその彼に念をおした。

「まず白土嘴（バイトツイ）のあたりで様子をみるんだぞ。村に歩哨がいた

らはいっていっちゃいかんぞ」
「わかってるよ」
といって、金虎ははいあがっていった。
鉄拴と得福の二人は状勢をおしはかって意見をかわした。彼らは上部の新しい決定は知らなかったが、家ではとうていもちこたえられないから、北方の山区へいって八路軍に加わる方がいいということに話がきまった。意見が一致してからも、金虎はなかなかもどってこず、二人はいらいらと案じながら坐っていた。鉄拴がいうには、
「このあんばいでは、おれたちは出ていったら一年やそこらはもどってこられんだろう。書類箱はこの新洞に運んできてかくしておこうや」
得福もそうした方がよいと思ったので、二人は金虎を待っているひまに、書類箱や灯火をこの新洞に運んできた。彼らはまず跳び下りたところへ箱をおき、マッチをすってあかりをともした、そして岩壁の下にあたるあたりを眺めると、きらきらと光るひとすじの流れと傾斜した石の面が目にはいった。遠いところや天井の方は黒々としてなにも見えない。入口のあたりは、一枚つづきの岩石で、穴倉の壁のように上の方へまるくなっており、上からは何本もの尖ったものが、柱のように垂れ下がっていた。地面にもおなじような尖ったものが出ている。なでてみると石だった。上下向かいあって、犬の牙——もちろんこんな大きな犬はいないが——のようで、鐘乳石である。彼らはあかりをたよりに、この壁に沿って右の方から左の方へ歩いていった。足の踏むもの、手のさわるもの、すべて一枚つづきの石だった。天井には、錐のように垂れ下がった何本もの柱が見えた。壁はまがりくねり、地面はでこぼこしている。どんどん進んでいくと、壁に人がもぐりこめるぐらいの小さな穴が見つかった。鉄拴は得福を待たせて、ひとりであかりをもってもぐっていってみると、中は袖部屋のようで、自分の屋敷の三間の北棟よりも広かった。どこから吹きこんでくるかわからなかったが、風に吹かれて彼は身ぶるいがでてきて、まだよく見ないうちに、手にもったあかりが吹き消されてしまった。彼はあわてて手さぐりで出てきて、得福にマッチをもらってあかりをともし、中の様子を話した。彼らはさらに壁に沿って進んでいった。そして入口から左すじ向かいのところまでいくと、壁の中ほどに人がしゃがんでいるようなのが見えた。ドキンとして、
「誰だ！」
と得福が叫んだが、相手は身うごきもしなかった。近よってよくみると、それは壁からでっぱっている石だった。猿に似ていて、ちょうど両股を開いているような形で、そのあいだから壁の傾斜をつたって水がひとすじ流れており、猿が小便をしている恰好にそっくりだった。壁のねもとには清水がたたえられていて、縁の石の溝へ流れ出していた。この流れは、洞穴の外の乱石の積みかさなっているところから流れ出

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.